中世末期・江戸時代における「すわる」の意味素描

岡野幸夫

一、はじめに

本稿では、中世末期から江戸時代における「すわる」の意味用法を記述し、「すわる」が現代語のような「スワル（坐）」という意味を獲得した時期を推定しようとする。これにより、もともと「スワル」という意味を表していた古代語の変化動詞「ゐる（居）」が存在動詞化し、さらにはアスペクト形式としても用いられるようになったという、日本語の歴史上の大きな流れの、いわば裏側で起こった言語変化の様相を明らかにしようとする。

用例の採集に当たっては、主に江戸時代の笑話を収録した文献を用いることとする（注1）。笑話の文献は、江戸時代の全期を通して存在するため、時代による変化を観察するのに適していると判断した。また、文体的にも口語主体であり、文献成立当時の日常語が現れているとみなすことができる点でも適している（注2）。中世末期の用例については、川本（一九八三）を参考しつつ、キリシタン資料、狂言台本を検索して用例を収集した。

以下、まずは「ゐる」の意味の変遷を整理し、それを踏まえて「すわる」の検討を行う。

二、「ゐる（居）」の意味の変遷

「ゐる」には、本動詞として単独で用いられる用法と、補助動詞として他の動詞に下接して用いられる用法とがあるが、本稿では「スワル」と直接関係しない補助動詞の用法については説明を割愛し、単独用法の「ゐる」の意味の変遷について概括する。

「ゐる」は、古代から中世にかけては「スワル」という具体的な動作を表す動詞であった（注3）。

① きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうにゆら〳〵として、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何事ぞや。童べと腹立ち給へるか」とて尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。「雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」とていとくちをしと思へり。このゐたる大人、「例の心なしの、かゝるわざをしてさいなまるゝこそいと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。

いとをかしうやう〳〵なりつるものを、烏などもこそ見つくれ」とて立ちてゆく。（「源氏物語」若紫、㈠157～158頁）（注4）

「ゐる」の意味がよく分かる場面なので、やや長く引用した。用例①は、療養のため北山を訪れた光源氏が、少女時代の紫上を垣間見る有名な場面である。立っている少女を尼君が「見上げ」る構図（波線部）であり、尼君はその場に座っていると解釈できる。また別の「ゐたる」大人が「立ちて」その場を去る（点線部）ことから、「ゐる」は「立つ」の対義語で「スワル」意味を表していることが分かる。

人間が主語になる場合は「スワル」意味が基本となるが、人間以外のものが主語になる場合には「（雲、霞、舟ナドガ）動カズニソコニトドマル」「（鳥ガ）トマル」「（塵、埃ガ）積モル」といった意味を表し、また、「（天皇、皇太子、斎宮ナドノ）位ニツク」という意味でも用いられる。以下にそれぞれ用例を示す。

②雲のゐる嶺のかけ路を　秋霧の　いとゞ隔つる　ころにもあるかな
（「源氏物語」橋姫、㈣321頁）

③かざしの台は沈の花足、黄金の鳥、銀の枝にゐたる心ばへなど、
（「源氏物語」若菜上、㈢262頁）

④　三条院、親王の宮と申しける時、帯刀陣の歌合に詠める　大江嘉言

君が代は　千代にひとたび　ゐる塵の　白雲かかる　山となるまで
（「後拾遺和歌集」巻第七、賀、四四九番歌）（注5）

⑤この御子生まれ給ひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にもようせずはこの御子のゐたまふべきなめり、と一の御子の女御は思し疑へり。（「源氏物語」桐壺、㈠6頁）

用例②は、宇治を訪れた薫中将が詠んだ和歌に対する大君の返歌である。脚注によれば、雲がかかる「嶺のかけ路（＝父八宮の修業の場）」を、秋霧がますます隔てる時節だ、という内容で、父親と離れた大君の孤独な心を詠んだものという。山に雲がかかることを「ゐる」で表している。

用例③は、紫上が光源氏の四十歳を祝う算賀の催しの後の宴に準備された調度品の一つ「かざしの台」についての説明である。造り物であるが、黄金の鳥が銀の枝に止まっているという、趣向を凝らした逸品である。

用例④は、天皇の治世が長く続くことを象徴的な言葉遣いで祈念した祝いの和歌である。「千年に一度、一粒積もる塵が、積もり積もって雲がかかるほどの高い山になるまで」という、無限に近い時間を表現している。作者の大江嘉言は、寛弘七（一〇一〇）年頃に没したとされている（注6）。

用例⑤は、「一の御子（＝後の朱雀帝）」の母である弘徽殿女御が、桐壺更衣が産んだ「この御子（＝後の光源氏）」を見て、東宮の地位が奪われてしまうかもしれない、と疑心を抱く場面である。「東宮になる」ことを「ゐる」で表している。

以上のように、「ゐる」が「スワル」意味を表す状況は、古代から中世にかけて続く。金水（二〇〇六）の第2章「古代語の「ゐる」と「あり」」および第3章「存在動詞「いる」の成立」によると、現代語のように「存在」を表す「ゐる」が成立するのは十五世紀ごろである。その契機は、まず「ゐる」に助動詞「たり」が下接し、「ゐる」の動作結果が継続することを表す「ゐたり」という形式が平安時代に発達したことが挙げられる。「ゐたり」は、「ゐる」の動作の意味を残しつつも「ソ

コニトドマル、滞在スル」といった状態性の意味を表すことから、古代から現代まで一貫して存在動詞として用いられている「あり」が表す「存在スル」という意味に近似している。この「ゐたり」が中世に「いた」となり、「あり」の意味領域の一部（生物が主語となる存在の意味）に侵入して存在動詞「いる」が成立した、と説く（注7）。

一方、「スワル」意味の「ゐる」もすぐには滅びることなく用い続けられるが、第三節で見るように、江戸時代の後期からは用例が見出しにくくなり、現代語では「居ても立ってもいられない」や「立ち居振る舞い」といった「立つ」と対比された慣用的な表現の中で化石的に残存するのみとなっている。

以上のように、存在動詞「ゐる」が成立・定着すると、「スワル」意味の「ゐる」は衰退していく。すると、「スワル」意味を担う形式が無くなって語彙の体系に穴があくこととなり、それを補うために「すわる」が進出してくることとなる。以下の第三節では、この点について検討する。

三、「すわる（坐）」の意味の変遷

金水（二〇〇六）では、存在表現の歴史に焦点を当てているため、「すわる」の具体的な考察は行われていない。本節では、中世末期から江戸時代の文献に現れる「すわる」の意味を検討する。十五世紀には「ゐる」が存在動詞へと変化を遂げていることをふまえ、「ゐる」の意味も視野に入れつつ分析する。

三―一、中世末期から江戸初期にかけての状況

川本（一九八三）は、中世末期に見られる「すわる」の例として以下の用例を指摘する（注8）。

⑥しぶがきはのどがすはりて物もいはれず（天正狂言本「ところ」四十一丁裏８行目）（注9）

⑦Suuari, u, atta.　スワリ，ル，ッタ（据わり，る，った）　物が定着している，あるいは，固定している．¶Ienuo　suuaru.（膳を据わる）自分の前に食卓〔膳〕が据えられる．¶Monjiga　suuaru.（文字が据わる）文字が印刷されている，または，書きつけられている．¶Funega suuaru.（船が据わる）船が浅瀬に乗り上げる，または，座礁する．¶Dô, l, cocorono　suuatta　fito.（胴，または，心の据わった人）しっかりして確固不動で，落ちつきのある人．（「日葡辞書」）（注10）

⑧○Ye（へ）に終る動詞でYe（へ）をVari（はり）にかへるもの（中略）Suye, uru（据ゑ，ゆる）。食卓等を置く。Suuari, u（すわり，る）。（後略）（ロドリゲス「日本大文典」279頁）（注11）

ただし、このうち用例⑥は「すわる」ではなく「すばる（窄）」であろう。渋柿を食べるとエグ味で咽喉が詰まった感じになることを言っていると思われる。用例⑨に示すごとく「日葡辞書」の見出語「すばる」とも意味的に共通することから、用例⑥は検討の対象から除外する。

⑨Subari, ru, atta.　スバリ，ル，ッタ（窄り，る，った）　狭まる．（中略）¶Cuchiga　subaru.（口が窄る）唇がすぼまって，口が小さくなる．¶Fitono　xindaiga　xidaini　subatte　yuqu.（人の身代が次第に窄つて行く）ある人の身上がだんだんと貧しくなり，衰えていく．（「日葡辞書」）

一方、用例⑦と用例⑧は、ローマ字表記のおかげで仮名表記より高い

精度で当時の日本語の発音が推定でき、「すわる」の確例と見て問題はない。しかも用例⑦は辞書という文献の性格上、さまざまな用法を例文として掲出しており、中世末期の「すわる」の意味用法を確認するのに恰好のデータとなる。

用例⑦について、まず注目すべき点は、現代語の「スワル」の意味が見られないことである。また、最初と第二の例文の説明がいずれも受け身になっている（点線部）。これは、「すわる」が他動詞「すう（据）」の受身用法から発達した（据エラレル→スワル）ことを示唆している（注12）。辞書においては、使用頻度の高い意味用法から順に掲出されるのが一般的である。用例⑦においては「食卓（膳）が据えられる」用法が最初に掲出されているが、後に見るように、江戸時代初期の笑話の文献に現れる「すわる」の用例は、この用法しか見られない。用例⑧も同様の用法であり、当時、この用法が最も普通であったと思われる。

また、中世末期の文献から新たに以下の用例を見出した。

⑩Xŏ midarini vgoqutoqimba, icuſa vomocarazu.

Cocoro. Taixŏno coco caxiconi zauo vtçuxeba, gin mo ſuuaricanuru monozo.（「天草版金句集」第222則）（注13）

（将、濫りに動く時んば、戦、重からず。心、大将のここかしこに座を移せば、陣もすわりかぬるものぞ。）

⑪いかにあなたこなたへぐなり〳〵とする腰なりとも、明王のさつくにかけ、ま一度いのるならば、などかすはらであるべきと

（大蔵虎明狂言集「腰祈り」上410頁）（注14）

用例⑩は、将たるもの、戦場ではむやみに動き回るべきでない、さもなければ陣が落ち着かない、という金言である。また、用例⑪は、行力を身につけた山伏が、祖父の曲がった腰を祈り直そうとする場面で、グニャグニャした腰であっても、明王の索で縛って祈れば、しゃんとする、というのである。これらの用例は、用例⑦の第四の用法に近い用法と見ることができる。

次に、近世初期の笑話の文献に現れる用例を検討する。前述したように、すべて膳あるいはそれに類した料理などが据えられる例である。

⑫ある夜、秀吉公、夜食に蕎麦がきを御好みなされ、御相伴衆へも下されける。折ふし長岡玄旨御登城なさるゝ。すなはち、蕎麦がきをすはり、蓋を開けて、取あへず、

薄墨に作りし眉のそばかほを　よく〳〵見ればみかどなりけり

（「昨日は今日の物語」第29話、87頁）

⑬右大臣信長公、ある年の元日暁、雑煮のお膳すわりけるを御覧ずれば、箸かたかたあり。「これは何者のしわざぞ」とて、大いに御気色かはれり。（「醒睡笑」巻之八、下264頁）

用例⑫は蕎麦がきが、用例⑬では雑煮の膳が据えられる。近世初期の笑話文献には全十一例の「すわる」が現れるが、右の用例以外でも「膳」「鉢」「箸」「和え物」「粥」など、いずれも膳、食器、料理が据えられる用例である。すなわち、「スワル」の意味で用いられた「すわる」はこの時期にはまだ用例を見ないのである。

その一方で、「スワル」意味の「ゐる」の用例は見出すことができる。

⑭下手なる長談義の席に、齢五十に余る女房、かたびらをかつぎ、聴衆みなみな立ち去れども、つひに一人立たず居たり。

（「醒睡笑」巻之二、上143頁）

⑮ある房に八九十ばかりなる僧、ただ二人碁を打つ外は他事なし。（中略）碁打つ様を見れば、一人は立ち、一人は居ると見るに、忽然と

して失せぬ。（「醒睡笑」巻之三、上253頁）

用例⑭は、長くて下手な説教にみな座を立ち去るなか、一人座っている女性がいる、という話である。また、用例⑮は、二人の僧が囲碁を打っているのだが、一人は立って打ち、もう一人は座って打つという不思議な打ち方をしている、という話である。いずれも「立つ」と対比的に用いられている（点線部）ことから、「スワル」意味を表していることが分かる。近世初期の笑話の文献に見られる単独用法の「ゐる」は全五十九例あるが、そのうち右の用例⑭、⑮を含めて四例が「スワル」の意味である。

また、存在を表す「ゐる」も多く見られる。

⑯又坊主死なれて後、我らに寺を譲らふぞととて恩がましく申され候へども、是も一日も世にゐられ候時に譲られ候はゞ、少し満足にても御座らふが、死なれて後は我らより外に弟子もなし、

（「昨日は今日の物語」第148話、363頁）

⑰かの僧、夜もすがらの語に、「そなたがゐればこそ、この寒夜にもあたたかなれ。いとほしの人や」といひけり。紛れもなき夫婦にこそと、人あまた押入りて見れば、何もなし。

（「醒睡笑」巻之三、上247頁）

用例⑯は、拾われて育てられた恩をまったく感じていない捨て子の言い分である。生きている間に譲られたならまだしも、というのである。また、用例⑰は、妻帯を疑われた僧の話で、用例中の「そなた」は実は三升入りの大徳利を指す。つまり、いずれにせよ破戒僧だった、という話である。これらの用例は「スワル」意味では理解できず、「存在する」意味を表していると思われる。

以上、中世末期から江戸初期にかけての状況を整理すると、「スワル」意味の「すわる」はまだ用いられておらず、「ゐる」がまだその任を担っている。ただし、存在を表す「ゐる」が圧倒的に高い比率で用いられている。

三―二、江戸中期の状況

この時期の笑話の文献に現れる「すわる」の用例は、次の一例しか見られなかった。

⑱かのばくち打ち、よきさいはいと思ひ、髪をそり落し、その寺へ据わりけるが、（「当世はなしの本」第十四話、118頁）

この用例は、落語「蒟蒻問答」の原型ともいえる話である。法問に敗れて空いた寺にばくち打ちが僧になりすましてにわか住職として居座る場面である。「落ち着く」「居座る」といった意味であり、いまだ「スワル」の意味は表さないが、人間が主語になる点で江戸初期までとは異なっている。中世末期の用例⑦（「日葡辞書」）の第四用法は人間の性格を言ったもの、また、用例⑪（「大蔵虎明狂言集」）は身体部位（腰）であり、人間を主語にしていると言えなくはないが、これらはあくまで「据えられる」対象として示されたものであって、人間自体の動作として主語にしているわけではないので、この時期に現れた用例⑱と同列に扱うことはできない。

用例⑱では「すわる」場所が「寺」であり、具体的ではあるがまだ広く漠然としている。これがもっと限定的な狭い場所に「すわる」ようになれば、現代語の「すわる」になるわけであり、用法としては現代語の「すわる」に近似してきていると言えよう。

近世中期の笑話の文献に見られる単独用法の「ゐる」は全二十二例あるが、そのうち二例が「スワル」の意味である。

⑲久三、夜あそびに出て、更けて帰り、戸を叩けど、玉も乳母も目があかず。旦那、よい夢を見さいて起きられ、戸をあけて、「久三か。夜歩き、合点がゆかぬ」と、叱り〳〵奥へ行かれしが、しばらくして又出て見れば、久三、立ったり居たり、方々を拝む。
（「軽口御前男」228頁）

⑳ある乞食、女房を呼びむかへ、幾久しくと祝ひける。舅の乞食、「聟殿の膝直し仕度候間、明晩御出」とて、一門の人々車座に居て、段々の馳走。（「露休置土産」319頁）

用例⑲は、夜遊びを叱られた久三が、立ったり座ったりして拝んでいるところである。この後、夜中に祈っても神仏は寝ているから無駄だとまた叱られるというオチがつく。また、用例⑳は、一同が車座に座って宴会を開くところである。いずれの用例も、「スワル」意味を表すことが明らかである。

存在を表す「ゐる」の用例も多数見られる。

㉑「さて〳〵、亭主は京にいても、これを知らぬか。うへ〳〵みそといふ事は、『上を見れば限りがないぞ、ただ下を見よ』といふ事にて、庭訓にもある事じや」といはれた。
（「当世はなしの本」116頁）

この用例は、都の味噌屋の看板に「上々みそ有」とあるのを読み誤った田舎者が、自分の無知を棚に上げて都人の亭主に物を知らないと言うところである。「いても」は「存在して（＝住んで）いても」という意味であり、「スワル」意味ではない。

以上、江戸中期の状況を整理すると、江戸初期までと似た状況ではあるが、「すわる」が人間を主語とするようになったことが大きな相違点として挙げられる。これは、「ゐる」が存在動詞として定着しつつあることと連動して、「すわる」が用法を拡大していることを意味していると思われる。

三―三、江戸後期から末期にかけての状況

この時期になると、「スワル」意味の「すわる」が、数は多くないものの安定的に現れるようになる。すなわち、この時期の笑話の文献に現れる「すわる」全八例のうち、七例までが「スワル」意味で用いられているのである。以下、「スワル」意味の「すわる」の用例を示す。

㉒樽を開き酒最中、向ふより十七八の美なる娘、しづ〳〵とあゆみ来る。（中略）かの娘、二三間向ふへすわり、「ちと、おあい、致しませう」と首をのばす。（「楽牽頭」102頁）

㉓医者、籠よりひよいと出で、片手は腹を押へ、片手は袂へ入れ、ずつと内へはいる。座敷へ通り、病人の前へ、ちんと座り、しづ〳〵と両手を出だし、（「面白し花の初笑」323頁）

用例㉒は、美人のろくろ首が出るという噂を確かめに行った二人の男が、待ちきれずに酒を飲み始めたところ、本当にろくろ首の娘が現れる話である。この話にはろくろ首の娘が座って首を伸ばし、床に置かれた大盃に注がれた酒を飲んでいる挿絵が付いており、「すわる」が「スワル」意味を表すことが明白である。

用例㉓は、医者が横になっている病人の前に座る、という場面である。「ちんと」とあるように、座り方を副詞的に修飾している。この時期の「すわる」の用例には、この他に「どっさりと（「臍くり金」71頁）」「ずらりと（「江戸嬉笑」108頁）」のように座り方の修飾語が共起する例が散見し、そのことからも「すわる」が「スワル」意味を表している

ことが明らかである。

次に、一例だけ見える、「スワル」意味を表さない用例を示す。

㉔ほどなく昼飯になる。「どうだ〳〵、八助。かまぼこが出来たか」と膳に居はる。と蓋を取って見たら、鯛も鮫も切身のままで煮付けてあるゆゑ、（「江戸嬉笑」115頁）

この用例は、かまぼこを作るよう指示しておいたのに、煮付が出てきた、という話である。「膳にすわる」という語法は用例⑦⑧をはじめ、中世末期から江戸初期の状況と同じものである。これは、伝統的で代表的な用法が化石的に残存したものであろう。

また、動詞の用例八例とは別に、複合語の構成要素として用いられた「すわり舟」の例が三例ある。

㉕「コレ御亭主。すわり舟の吸物が所望じや」といへば、「ハイ、畏りました」といふて吸物持つて出る。蓋を取って、「これは何じや」「ハイ、すわり舟でござります」「これがどふしてすわり舟じや」「ハイ、干塩の吸物でござります」（「花笑顔」282頁）

この用例は、どんな吸物でも出します、という看板を見た若者が、無理難題を言って困らせようと、とても作れそうにもない「すわり舟の吸物」を注文する話である。しかし出てきたのは魚鳥類の肉の塩漬け（醤＝干塩）の吸物であった。理由を聞く若者に、亭主は頓智（干塩＝引き潮で船底が海底に着いて動かない）で返す。これは用例⑦（「日葡辞書」）の第三用法（「船が座礁する」用法）が慣用語化して残存したものであろう。

一方、江戸後期～末期の笑話の文献には、単独用法の「ゐる」が全七十六例あるが、「スワル」意味で用いられた用例は見出だせず、いずれも存在の意味を表す用例であった。このことは、「ゐる」がこの時期には存在動詞になっていたことを示す。

以上、江戸後期から末期の状況を整理すると、「すわる」は、慣用的な語法として伝統的な用法を残す例も一部見られるが、「スワル」意味を獲得していると言える。これと連動して、「ゐる」が「スワル」意味を表すことはなくなっており、存在動詞化は完了していると思われる。

四、おわりに

まとめとして、第三節で分析した「すわる」について、単独用法の「ゐる」と対比させた表を示す。表中の括弧内の数字は「スワル」意味を表す用例数（内数）である。参考として、動詞の連用形に「ゐる」が直接した「～ゐる」の用例数と、接続助詞「て」を介して「ゐる」が下接する「～てゐる」の用例数（いずれも延べ数）も併せて示す。ただし、中世末期～江戸初期の列で、「ゐる」「～ゐる」「～てゐる」の数値は「昨日は今日の物語」「醒睡笑」のみの数値である。

この表からは、江戸後期以降に「スワル」意味の「すわる」の用例が現れ、数は少ないものの、比率から見れば安定的に用いられていることが分かる。これと連動して、江戸後期以降になると「スワル」意味の「ゐる」は用いられなくなっている。したがって、「スワル」意味の「すわる」が成立・定着したのは、江戸後期（十八世紀後半）ごろのことであると結論づけることができる。その過程としては、「ゐる」が存在動詞として定着するにつれて、もともと「膳」「船」など、人間以外のものを主語としていた「すわる」が用法を拡げ、江戸中期（十八世紀初期）ごろに人間を主語とするようになり、江戸後期ごろには「スワル」意味

を獲得したものと考える。これと連動して、「ゐる」が存在動詞として定着する（つまり「スワル」意味を完全に表さなくなる）につれて、アスペクト形式としては「～ゐる」から「～てゐる」に交代するが、その画期として認められるのは、「～てゐる」が急増する江戸後期であろう。このことも、「スワル」意味の「すわる」の成立時期が江戸後期ごろであることを裏づけている。

今後の課題としては、「すわる」以外の「スワル」意味を表す形式について検討し、「すわる」との関係を明らかにすることが必要となる。現在のところ、「なほる（直）」「腰を掛ける」「ざす（座）」といった形式を見出しているが、詳細は笑話以外のジャンルの文献の検討を含め、今後の検討に俟ちたい。

	すわる	ゐる	～ゐる	～てゐる
中世末期～江戸初期	15 (0)	59 (4)	97	38
江戸中期	1 (0)	22 (2)	18	46
江戸後期	2 (2)	45 (0)	12	120
江戸末期	6 (5)	31 (0)	7	138

（注）

1、本稿で使用した江戸時代の笑話文献と出典は以下の通り。文献名の下の括弧内は成立年代を示す。用例は読みやすさのため、私に表記を改めた箇所がある。

【江戸時代初期】

・昨日は今日の物語（寛永ごろ〈十七世紀前半〉刊）

宮尾（二〇一六）

・醒睡笑（寛永五〈一六二八〉年序跋、寛永年間刊）

鈴木（一九八六）

【江戸時代中期】

・当世手打笑（延宝九〈一六八一〉年刊）・当世はなしの本（貞享ごろ〈十七世紀末期〉刊）・かの子ばなし（元禄三〈一六九〇〉年刊）・軽口御前男（元禄十六〈一七〇三〉年刊）・露休置土産（宝永四〈一七〇七〉年刊）

以上、武藤（一九八七ａ）

【江戸時代後期】

・鹿の子餅（明和九〈一七七二〉年刊）・楽牽頭（明和九〈一七七二〉年刊）・聞上手（安永二〈一七七三〉年序文）・今歳咄（安永二〈一七七三〉年序文）・茶のこもち（安永三〈一七七四〉年序文）・花笑顔（安永四〈一七七五〉年刊）・鳥の町（安永五〈一七七六〉年刊）

以上、武藤（一九八七ｂ）

【江戸時代末期】

・詞葉の花（寛政九〈一七九七〉年刊）・臍くり金（享和二〈一八〇二〉年刊）・江戸嬉笑（文化三〈一八〇六〉年刊）・臍の宿替（文

化九〈一八一二〉年刊）・種が島（文化年間〈十九世紀初期〉刊）・屠蘇喜言（文政七〈一八二四〉年刊）・太鼓の林（文政十二〈一八二九〉年刊）・面白し花の初笑（天保二〈一八三一〉年刊）

以上、武藤（一九八八）

2、この点につき、小高（一九六六）は次のように述べる（傍線岡野）。

「笑話本は時代性が強く世相を如実に反映する点、文学研究の好個の資料であると共に、また、それが殆ど口語乃至は準口語体で書かれている点、江戸時代の口語の変遷、実態を知る上に好個の資料である。」（7～8頁）

3、この点は岡野（一九九二）でも指摘した。ただし、その時にはデータの分析が不十分であり、「ゐる」が「存在する」の意味も表すとしていたが、その後、金水（二〇〇六）の説くところに従い、平安時代にはまだ存在動詞化していなかったと考えるに至っている。

4、「源氏物語」の用例は、柳井他（一九九三～一九九七）により、用例が所在する巻名、冊数、頁を示す。用例の検索には柳井他（一九九九）を用いた。ただし読みやすさのため、私に表記を改めた箇所がある。

5、「後拾遺和歌集」の用例は、久保田・平田（一九九四）による。ただし読みやすさのため、私に表記を改めた箇所がある。

6、久保田（一九九五）の「作者名索引」による。

7、金水（二〇〇六）では、古代語の変化動詞としての「居る」は「ゐる」、存在動詞としての「居る」は「いる」のように区別して表記している。本稿では、引用箇所を除き、歴史的連続性を重視して一貫して「ゐる」と表記する。

8、この他、古い例として「蜻蛉日記」（平安時代十世紀後半に成立）の用例を指摘するが、本文に異同が多く確例としがたいとする。

9、「天正本狂言」の用例は、内山（一九九八）による。ただし私に濁点を付した。

10、「日葡辞書」の用例は、土井他（一九八〇）による。原文は横書きで、句読点はカンマ（，）とピリオド（．）を用いる。

11、ロドリゲス「日本大文典」の用例は、土井（一九五五）による。原文は横書きで、句読点はカンマ（，）と句点（。）を用いる。

12、鈴木（一九九〇）で「すわる」と同じ「自動有標型（岡野注：他動詞から自動詞が派生したもの）」に分類される「聞こゆ（←聞く）」「見ゆ（←見る）」が、ともに受け身の意味（聞カレル、見ラレル）を表す用法があることとも、何か関係があるかもしれない。他動詞の受け身用法は意味的に自動詞に近い、ということか。

13、「天草版金句集」の用例は、金田（一九六九）による。原文は横書きで、句読点はカンマ（，）とピリオド（．）を用いる。

14、「虎明本狂言集」の用例は、池田、北原（一九七二）による。用例の検索には北原、小川（一九八二）による。ただし読みやすさのため、私に表記を改めた箇所がある。

（引用・参考文献）※発表年順

・土井忠生（一九五五）『ロドリゲス　日本大文典』三省堂

・小高敏郎（一九六六）『江戸笑話集』岩波日本古典文学大系、岩波書店に所収の同氏による解説

・金田弘（一九六九）『天草版金句集本文及索引』白帝社

・池田廣司、北原保雄（一九七二）『大蔵虎明本狂言集の研究　本文篇上』表現社

・土井忠生、森田武、長南実（一九八〇）『邦訳日葡辞書』岩波書店
・北原保雄、小川栄一（一九八二）『大蔵虎明本狂言集総索引３聟類・山伏類』武蔵野書院
・川本栄一郎（一九八三）「すわる（坐る）」（佐藤喜代治編『講座日本語の語彙』第十巻「語誌Ⅱ」、明治書院に所収）
・鈴木棠三（一九八六）『醒睡笑　上・下』岩波文庫、岩波書店
・武藤禎夫（一九八七ａ）『元禄期　軽口本集　近世笑話集（上）』岩波文庫、岩波書店
・武藤禎夫（一九八七ｂ）『安永期　小咄本集　近世笑話集（中）』岩波文庫、岩波書店
・武藤禎夫（一九八八）『化政期　落語本集　近世笑話集（下）』岩波文庫、岩波書店
・鈴木泰（一九九〇）「自動詞と他動詞」（別冊國文學№38『古典文法必携』學燈社に所収）
・岡野幸夫（一九九二）「平安時代和文における「～ゐる（居）」に関する一考察」（『山口国文』第十五号）
・柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎（一九九三～一九九七）『源氏物語　一～五』新日本古典文学大系、岩波書店
・久保田淳、平田喜信（一九九四）『後拾遺和歌集』新日本古典文学大系、岩波書店
・久保田淳（一九九五）『八代集総索引』新日本古典文学大系別巻、岩波書店
・岡野幸夫（一九九五）「平安・鎌倉時代における「動詞＋テ＋キル（居）」の意味について」（『鎌倉時代語研究』第十八輯）
・柳井滋、室伏信助、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎（一九九九）『源氏物語索引』新日本古典文学大系別巻、岩波書店
※当該文献を補完する小冊子「源氏物語索引　追補一覧」も参照した。
・内山弘（一九九八）『天正狂言本　本文・総索引・研究』笠間書院
・金水敏（二〇〇六）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
・宮尾興男（二〇一六）『きのふはけふの物語　全訳注』講談社学術文庫、講談社